様式第４号（第９条関係）

令和６年１１月１日

小野市議会議長 髙坂純子　様

派遣議員　喜始　真吾

議員派遣報告書

先般、実施しました議員派遣について下記のとおり報告いたします。

記

１　派 遣 日

令和６年１０月１７日・１８日

２　派遣議員

髙坂純子　平田真実　掘井ひさ代　山本麻貴子　宮脇健一

村本洋子　喜始真吾　河島三奈　　前田光教　　小林千津子

３　派 遣 先

アクリエ姫路（姫路市文化コンベンションセンター）

４　内　　容

全国都市問題会議

健康づくりとまちづくり

～市民の一生に寄り添う都市政策～

第１日　１０月１７日（木）

開会式

開会挨拶

全国市長会会長　広島県広島市長　松井一實　氏

開催市市長挨拶

兵庫県姫路市長　清元秀泰　氏

来賓祝辞

基調講演

生命を捉えなおす　―動的平衡の視点から―

生物学者、青山学院大学教授　福岡伸一　氏

生命とは、手、足、胴体、頭、あるいは各臓器といった「部品」が組み合わさってできたプラモデルのような機械論的なものではなく、私達が食べた分子は､身体を構成する分子と絶え間なく交換され続けている。つまり私たち生命とは、部品から成り立っている分子機械ではなく、部品自体のダイナミックな分解と合成の中に揺蕩う“分子の淀み”である。

自らを積極的に壊し続けることによって、系内にたまるエントロピーを捨て続け、またそれを作り直すことでバランスを保つ、それが生命体の特性だ。

主報告

市民の「LIFE」（命・くらし・一生）を守り支える

姫路の健康づくりとまちづくり

兵庫県姫路市長　清元秀泰　氏

姫路市は人生１００年時代を見据え、市民の「LIFE」（命・くらし・一生）を守り支えることを市政の基本方針としている。

取り組みとしては、

１．市民による主体的な介護予防の促進

①軽度認知障害（MCI[5]）等の予防支援

②生活習慣の改善並びに各種疾病の早期発見及び重症化予防

２．ウォーカブルなまちづくり

①公共空間の利活用、歩行者利便増進道路「ほこみち」

②Himeji 大手前通りイルミネーション

３．ICT を活用した健康づくり

①マイナンバーカードを活用した救急業務迅速化・円滑化

②「ひめじポイント」を活用した健康づくりの促進

４．未来を担う子供たちの健やかな成長を支援

①子どもの未来健康支援センター「みらいえ」の開設

②子育て情報の発信

★人口減少・少子高齢化が進む困難な時代において、市民の「LIFE」を守り、麻痺に活力を生み、明るい未来を切り開いていくための原動力は「人」であり、健康は人づくりの根幹をなすものである。
これからも子供から高齢者まで、全ての市民の「LIFE」が輝き、誰もが健やかに生き生きと暮らせるまちの実現を目指す。

一般報告

生き物から学ぶ健康なまちづくり

筑波大学システム情報系教授　谷口　守　氏

市民の健康と都市の健康は密接に関係している。都市も市民も同時に健康になるためには、まちづくりの在り方自体について、生き物から学ぶという姿勢が極めて有効である。

１．バイオミメティクス（生物模倣）への展開

①循環不全

各市町村が自分の行政区域の中だけを見て計画を作成している。

そのため、各市町村の都市計画マスタープランの将来構想図を張り合わせると相互に関連性のないモザイク図になる。

②肥満

必要なサイズより大きく郊外に膨れ上がった肥満型都市は人口減少が進んでいる中においては道路や下水道などのインフラ等、行政コストが大きくなる。人口規模に応じた範囲で、コンパクトに展開することがこれからのまちづくりの基本である。

③骨粗しょう症

まちの中でも空き家や空き地が増え、中がスカスカになっている。行政サービスを受ける側の人が減少するため、路線バスやコンビニが撤退するといったことが発生する。このような「寝たきり都市」にならないよう普段から対策することが必要。

★人口減少が進んでいる中で、健康なまちづくりを進めるには、当たり前のように考えられている競争して儲けるというような「新自由主義経済」から離れてみる必要がある。
地方分権を進めることはよいこともあるが、人口の取り合いなど不毛で疲弊を招くことも少なくない。補助金のカンフルを打って競争を促進す

るのではなく、周囲と協調しながら都市構造の体質改善を図っていくことが各市町村に求められている健康まちづくりの本質である。

一般報告

都市そのものを健康にするまちづくり

～ストレスを軽減し、リフレッシュできるまち へ～

千葉県流山市長　井崎義治　氏

流山市では平成１９年１月１日に健康都市宣言を行い、流山市健康都市プログラムを策定し、健康にかかわる事業を五つの分野に分けて、健康都市施策を多岐にわたり展開している。

その中から「グリーンチェーン戦略及び認定制度」を紹介する。

流山市は下総台地に広がる緑豊かな地域でしたが、昭和３０年代から雑木林を切り開き大規模な住宅地が造成されるようになりました。

多くの転入者が流山市に住居を構える理由の一つは「緑」の多さでしたが、このままでは流山市の大切な資源が枯渇するのは時間の問題でした。区画整理事業は止められないが、失う緑を少しでも回復できないかが平成１５年当時の喫緊の課題の一つだった。

それ以降、１年半にわたりグリーンチェーン戦略の考え方の研究会を続けて平成１８年にスタートした。

認定基準として沿道の植樹・植栽の本数や、植樹時の高さを規定し、認定物件の環境価値が確実に高まるように規定した。

グリーンチェーン認定物件は景観価値・環境価値を高めるとともに、資産価値を高めることも明らかになり、当初、グリーンチェーン認定取得の協議に難色を示す事業者は少なくありませんでしたが、今や認定取得は流山基準になった。

緑豊かな安らぎを感じるまちづくりは、市民にとっても、来訪される市外の方にとってもストレスを軽減し、リフレッシュできる健康都市「流山市」の重要な都市政策となっている。

★流山市は「都市そのものを健康に」するために「すべての政策に健康視点を」を基準とした政策の立案と推進により、すべての市民のストレスを軽減し、同時にリフレッシュできる環境整備や施策展開に継続的に

取り組んでいく。市民が Well-Being を実現することが流山市民の健康と幸せにつながるからである。

一般報告

IT/AI の健康分野への適用例

～姫路市の健診データ解析と歌唱による誤嚥予防～

兵庫県立大学副学長　畑　　豊　氏

１．２００８～２０１２年の姫路市の健康診断データを用いた解析について

健康づくりとまちづくりを考えるとき、まず、市は市民の健康状態を知ることが必要である。

姫路医師会から提供を受けた姫路市での特定検診・後期高齢者検診における男女 13,033 名の 2008 年から 2012 年までの 5 年分の健診結果を使用して、解析を実施し、健康状態を可視化した。

受診者の年齢は男性は 66.4 歳（±6.67）、女性は 65.4 歳（±6.25）である。

その結果、男女とも 40 歳以上年代を問わず、HbA1c が高く、40 代男性を除き、性別、40 歳以上の男女を問わず BMI は低かった。また、40 代、50 代の LDL-C 値を除き、性別、40 歳以上の男女を問わず、HDL-C、LDL-C、尿酸は高く、血清クレアチン値、収縮、および拡張期血圧、中性脂肪は低かった。

このように姫路市では、40 歳以上で HbA1c、LDL、尿酸が高い可能性がある。総合的な健康状態を判断することは難しいので、ここではファジィ論理に基づく評価手法を述べる。

ファジィ値は０から１の実数地をとる。ここでは解析するために 2014 年日本人間ドック学会が定める判定基準を用いた。

姫路市の健康診断結果にファジィ解析を適用した結果、

・HbA1c のファジィ値が低い、すなわち値が悪い。

・LDL のファジィ値が HbA1c ほどではないが低い、すなわち値が悪い。

この結果、姫路市の男性は糖尿病になるリスクが女性より高いこと、女性の LDL は男性よりも悪い。ファジィ値は地域の健康特性を表すことができ、都市間、地域間の特性の違いを分析するのにも有効である。

２．AIによる嚥下解析とその歌唱による誤嚥への挑戦

日本の６５歳以上の高齢者は、総人口の 29.1%（ほぼ３人に１人）で、過去最高の 3,622 万 7 千人（2024 年総務省）である。

また、65 歳以上の約 3 分の 1 が嚥下障害（咽頭から食堂・胃へと飲食物を送り込むという一連の動作が正しく働かない）である。すなわち、わが国では約 1,000 万人の高齢者が嚥下障害であると推定される。肺炎による死者の約 90%以上は 65 歳以上の高齢者である。高齢化に伴って誤嚥性肺炎による死者は増え続けており、1,000 万人の嚥下障害者の誤嚥防止、嚥下機能改善のためのシステム構築は喫緊の課題になっている。

嚥下機能評価のスクリーニングとして、もっとも簡便な方法は RSST で、被験者の喉仏・舌骨に人差し指と中指の腹を軽くあてた状態で、30 秒間唾液を飲み込む様子を確認し、その回数を計測する。これが RSST である。

2020 年に丹波市で実証実験を実施した。

歌唱者約 50 名、非歌唱者約 150 名が対象で、歌唱者約 50 名のうち 33 名は、共同研究者で歌手の足立さつき氏の歌唱訓練を受けている。この統計解析結果は、RSST において歌唱者は非歌唱者より有意であった。

この実験の結果は、自発的嚥下が発話に及ぼす影響を安定させるうえで、歌うことが重要な枠割を果たす可能性があることを示した。

★健診結果の解析は、まさに「健康づくりとまちづくり～市民の一生に寄り添う都市政策～」のエビデンスを得るための重要な指針、同時にファジィ値の表示は、毎年の健診で悪くなっている程度が一目でわかる指標である。

また、嚥下機能維持のための方策として歌唱の推奨を取り上げ、それを広げることで高齢者の嚥下機能の維持を狙ったものである。

第２日　１０月１８日（金）

パネルディスカッション

【テーマ】

健康づくりとまちづくり～市民の一生に寄り添う都市政策～

【コーディネーター】

中央大学法学部教授　宮本太郎　氏

【パネリスト】

高岡病院児童精神科医　三木崇弘　氏

NPO 法人日本栄養パトネット理事長　奥村圭子　氏

長野県茅野市長　今井　敦　氏

大阪府泉大津市長　南出賢一　氏

・**宮本太郎氏**：1958 年東京生まれ。中央大学大学院法学研究科卒業。立命館大学教授、北海道大学教授などを経て、2013 年より現職。内閣府参与、総務省顧問、男女共同参画会議議員、社会保障改革国民会議委員など歴任、現在、地域共生社会の在り方検討会議座長、東京都税制調査会委員、「月刊福祉」編集委員長

・**三木嵩弘**：姫路市出身。愛媛大学医学部卒業、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程修了（医学博士）早稲田大学大学院経営管理研究科修士課程修了（経営管理学修士）小児科後期研修の後、国立成育医療研究センターこころの診療部で児童精神科医として勤務。2019 年 4 月より、クリニック、公立学校スクールカウンセラー、児童相談所、児童養護施設、保健所など、医療、教育、福祉、行政の各分野で臨床活動。2022 年 7 月より地元にＵターンし、勤務医をしながら地域の子育て支援のため活動中。

・**奥村圭子**：愛知県知多郡在住。三重大学大学院医学系研究科（地域医療学専攻）博士課程単位取得退学、（医学博士）。過疎地域在住者や社会的要配慮者の栄養障害の予防を目的とした地域栄養ケアプログラム「栄養パトロール」を開発。そして、愛知県日進市と常滑市・和歌山県紀美野町等で保健事業と介護予防の一体的取り組みや、山梨県山梨市で重層的支援体制整備事業、気仙沼市復興公営住宅や能登半島被災地支援など、ボランティア活動で活用している。

・**今井　敦**：1961 年生まれ。長野県茅野市で育つ。駒澤大学経済学部卒業。2003 年から茅野市議会議員を１期、2007 年からは長野県議会議員を３期務める。2019 年に茅野市長に初当選し、現在２期目。少

子高齢化や人口減少が進展する中、2020 年に第２次地域創生総合戦略で「若者に選ばれるまち」を目指すと宣言。2022 年の「デジタル田園健康特区」（内閣府）の指定を契機に、市内外の民間事業者などと連携しながら、保健・医療・福祉を中心としたさまざまな分野の地域課題の解決に向け、デジタル技術を活用した取り組みを進めている。

・**南出賢一**：1979 年大阪府泉大津市生まれ。2002 年関西学院大学商学部卒業後、民間企業での勤務を経て、2007 年泉大津市議会議員に当選（３期）。2017 年に泉大津市長に就任し、現在２期目。泉大津から日本の共通課題の解決と社会をよりよくするための先導的なモデルの創出に「官民連携・市民共創」で取り組んでいる。健康の分野では 2023 年に未病予防対策先進都市を目指して「泉大津市健康づくり推進条例」を制定し、市民が主体的に自分に合った健康づくりに取り組むことができる環境の整備を推進している。

★それぞれの専門分野から「健康づくりとまちづくり」についての取り組み状況の発表があった。とりわけ南出賢一氏の発表は自身がボクシングの選手だった時の食事に対する栄養バランスに基づいた学校給食のメニュー作りは感銘を受けた。

閉会式

次期開催市市長挨拶　栃木県宇都宮市長　佐藤栄一　氏

閉会挨拶　公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所

理事長　小早川光郎　氏

５　所　　感

自治体を支えるのは人、支えるためには人は健康でないといけない。健康は人間としての原点、個人でも家族であっても健康であれば困難なことも乗り越えていけるし、未来を創造する提案ができる。これはどのような組織にでも言えるということを改めて認識した。少子化が進んでいる中にあって、兵庫県立大学の畑先生の発表で不妊治療の技術を初めて聞いたが、非常にハイレベルな話、一筋の光明を見た気がする。